

道徳的信念の相互依存性の孕む認識論的問題

野上志学(日本学術振興会、一橋大学法学研究科)

我々の道徳的意見は一致していることもあれば、一致していないこともある。もし「我々」として、あらゆる人間を含めるとすれば、そうした一致はおおよそ存在しないかもしれない。だが、もし「我々」として、一つの社会を形成している集団を取るとすれば、そうした一致を見いだせることもあろう。本発表では、我々が道徳的意見において一致しているとき、その一致が認識論的に重要であるか否かについて議論する。

「道徳的直観が一致するとすれば、それはその直観の内容を信じる理由になる」と考えられるとすれば、そうした一致は認識論的に正の重要性をもつ。このようにして道徳的意見を支持する議論を、一致論証と呼ぼう。逆に、もし一致が道徳的意見を信じる理由にならないのであれば、一致は認識論的に重要ではない。本発表における結論は、道徳的意見の一致は、認識論的に重要ではない、というものになる。我々は、道徳的意見の一致、とりわけ、道徳的直観における一致がどれくらい一致されたところの道徳的意見を支持するのかという問いを、証言論(e.g., Huemer 1997)で提示されてきた確率モデルによって検討する。証言論を用いることには、主に2つの理由がある。

第1に、証言論ではここでの我々の関心と並行的に、証言の一致の認識論的重要性が議論されており、証言論で用いられる確率モデルを転用することによって厳格な形で議論を進められるからである。第2に、道徳的意見の一致は何らかの証言の一致と同一視できるからである。意見の証言だけが、(内観された?)直観と異なり、公共的な証拠になるからである。結局のところ、直観が仮にミエ(seeming, appearance)と同一視できる(e.g. Huemer 2005)としても、少なくとも他人にはミエの発生は観察できない。(むろん、直観を我々の局所的な物理的状態に付随するような状態、それゆえ、何らかの意味で外部から観察可能でありうる状態であるとしても、それが認識論的に正の重要性をもつか否かは明らかではない。)それゆえ、証拠として認められるのは、「ある内容の直観が生じている」という証言であるか、その直観の内容の証言かではない。さらには、自らの直観ですら、その直観に基づいて、他人に提示する議論を組み上げるとしたら、直接的な議論の前提は、公共的に認められるような証言の存在ではない。こうして、直観に基づく議論の精査は、結局のところ、直観に関する証言の信頼性の問題に帰着するだろう。

我々の議論は、多数の証言の信頼性がどのような条件に依存するかをみることによって、一致論証を挫くことを目指す。主要な議論の基本的な筋は非常に簡潔である。意見の一致はその意見の証言の一致と同一視することができるが、一般に証言の一致が証言内容を信じる理由になるのは、証言の間の適切な独立性(cf. Dietrich & Spiekermann 2013)が保たれている場合に限られる。しかしながら、とりわけ道徳的意見の場合は、(例えば、社会的、進化的、ゲーム理論的事情によって、)そうした独立性は破られている。したがって、道徳的意見の一致は認識論的重要性をもたない。

参考文献

- Cohen, L. J. 1977. *The Probable and the Provable*, Clarendon Press.
Dietrich, F., and K. Spiekermann, 2013. 'Independent Opinions? On the

Causal Foundations of Belief Formation and Jury Theorems', *Mind*, 122: 655-685.

Earman, J., 2000. *Hume's Abject Failure: The Argument Against Miracles*, Oxford University Press.

Huemer, M., 1997. 'Probability and Coherence Justification', *Southern Journal of Philosophy*, 35: 463-472.

Huemer, M. 2005. *Ethical Intuitionism*, Palgrave MacMillan.